

大野順一著

平家物語における死と運命

刊行
創
文
社

[平家物語における死と運命]

昭和四十一年十二月十日 印刷
昭和四十一年十二月十五日 發行

定價 壹千五百圓

著 者 大 野 順 一

發行者 久保井理津男

東京都千代田區代官町二

印刷者 中 内 佐 光

東京都文京區大塚六ノ二ノ五



發行所

東京都千代田區
代官町二番地 株式會社

創 文 社

電話丸ノ内 四〇〇八
振替 東京 九二四七二

(落丁・亂丁本はお取替えいたします)

曉印刷・橋本製本

序

この書は、古代末期から中世初期へかけての「間」の時代にあらはれた文藝作品を、特に平家物語を中心として、問題史的に追求することによつて、その時代に生きた人間の生き方と、その歴史との關りあひを明らかにしようと試みた論集である。

保元の亂が思想史のうへに果した役割は、まことに大きい。この亂を境として、時代があらゆる面で一變したことは顯著である。そのあらはれの一つは、萬が一といふことが却つて自然のこととなつてしまつたといふ、人間の存在様式の變化であらう。それはなによりも保元の亂のもたらした「死」を契機として行はれたのであつた。ここに「死」とは、いはば歴史が時代に送りこんでくる運命の象徴としての死の謂である。この死は新しい。この死によつて時代は古代から訣別し、「間」の時代として、やがて中世の完成への第一歩を印すのである。平家物語の時代は、かうした意味での死の時代であつた。

人間の存在様式が生から死に移つたといふことが、平家物語の時代の特色といへるのであるが、それは生と死とが相即的にとらへられるやうになつたことを示してゐるだらう。生と死とは、本來、相對的なものではなく、相即的なものである。生はいはば死の表象であり、死はいはば生の根源である。人間の實在（リアリティ）は、

かうした觀點からのみ正しく理解されるであらう。平家物語の時代は、まさに生と死とが相即的なものと考へられるやうになつた最初の時代であつた。この時代の人間にとつて、生の問題はおのづからに死の問題であり、死の問題はそのまま生の問題であつた。ここに來て生死觀は、古代における「生」觀から「死」觀となる。生死とは畢竟、死の謂に他ならない。これが、思想史のうへでの中世を生み出す契機となつたところのものであつたらう。中世の根柢をなす空、無の世界は、死の透關なしには開かれえない。

私は、このやうな死の時代にあつて死の存在様式をもつ人間が、歴史の送りくる運命としての死に對しながら、いかに時代を、またみづからを生き、いかに死んでいつたか、に深い興味と關心をいだいた。死の時代にあつて、人間とはなにであつたか、それがこの書に收めた試論の底邊を流れる一貫した問ひである。

かうした問ひが、平家物語を中心とした語りもの文藝にはたして妥當であるか、については多少の異義があるかも知れない。しかしながら、思想史における中世が最もはじめに、かつ最も鮮明に創出せられたのは、他ならぬ語りもの文藝であつた。そしてその語りもの文藝は、たとひ原作者が何びとであり、その増補加筆者がいかなる個人であつたとしても、それが語りものといふ、數多の語り手と聽き手との共通感情（シンパシー）の世界で生長し、完成されたものであるかぎり、他のジャンルの作品よりもすぐれて時代精神の相をあらはにしてゐる筈である。ゆゑに、私の問ひかけは容認せらるべきものであると信ずる。

私が死の問題に關心をもち、それを基盤として平家物語の時代を知らうとした理由は、他にもある。それは死の問題がなによりも現代的な問題であると思はれたからである。現代は生を死から切り離し、あるひは死と相對的なものとして扱つてゐるやうに見うけられる。現代文明はますます生の豊富、過剰の方向に轉じてゐる。そして死は、それをいかに回避するかといふ問題としてのみ提出されてゐるやうである。換言すれば、生をいかに豊

富なものとして延長するかに關心がはらはれてゐるやうである。たとへば死は自然科學の、特に醫學の對象でなくなつてしまつたのではないか。しかしながら、生の延長は何ら死の解決にはなりはしない。そこに人間の救済は期待されえない。そして現代は、このやうに死を回避して生の延長の方向に焦心しながらも、なほ死の不安を深めてゆく状況にある。生の豊富、過剰は、一層死を身近に招きよせる。死の影は現代を覆つて如實である。現代人にとつて、實は生きてゐることが僥倖で、かへつて死が當り前のことになつてゐるのかも知れない。萬が一が自然のことに他ならないといふ時代にあつて、人間はいかに生き、いかに死に對し、いかに死んでいつたかといふ問ひかけは、ただに平家物語の時代のみに限られたものではない。現代もまた「自然の事候はば」の時代なのである。

私の志したところが、この書において果されえたか、どうか。それは自問しない。ただ己が淺學無能を示すのみである。

所收の諸篇は、明治大學文學部紀要「文藝研究」の第六號（昭三四・三）、第八號（昭三六・三）、第九號（昭三七・三）、第十二號（昭三九・一一）、第十四號（昭四〇・一一）に、それぞれ發表したもので、排列は發表の順序にしたがつた。いまここにまとめるに際して、全體に互つて語句の修正を施し、二三の箇所には修補を加へた。特に「穢土についての考察」の前後の部分には、かなりの修補を加へたが、それも根本的に變更したわけではない。誤謬をより寡くするための所爲である。また使用した諸テキストはすべて發表當時のままにしておいた。

最後に、私事ながら、この書に收めた試論のすべては、恩師唐木順三先生の御指導をいただいでできあがつたものである。またこの書も、ひとへに先生の御盡力によつて世に出ることができたのである。先生なしにこの書も、そして私もありえなかつた。言葉にいひつくしえぬ心のせめてものあらはれとして、私はこの書を先生に捧

げる次第である。

昭和四十一年七月

著

者

目次

序

平家物語における時間認識の問題……………五

——あはれと運命と無常との關聯——

平家物語における死の問題

その一 自然についての考察……………九

その二 穢土についての考察……………一四七

その三 不思議についての考察……………三〇

浄土教における「不思議」の考察……………三七

——法然・親鸞・一遍——

索引……………1
16

平家物語における死と運命

恩師 唐木順三先生に捧ぐ

平家物語における時間認識の問題

——あはれと運命と無常との關聯——

一 あはれの變質

平家物語⁽¹⁾には、あはれといふ言葉が非常に多く出てくる。「我と御位を儲君に譲り奉り、麻姑射の山の中も、閑になど思召す先々だにも、哀は多き習ぞかし。況や是は御心ならず、押下されさせ給ひけん哀さ、申も中々愚也」(巻第四・嚴島御幸)といった具合である。いま試みに、あはれの使用されてゐる頻度を、岩波文庫本によつて急ぎ數へてみると、百一語、感歎詞五十四語、計百五十五語に及んでゐる。その他、あはれさ、あはれげ、あはれみ、あはれむ、ものあはれ、など數へ入れると、總數百六十七語となる。この數は岩波文庫本にして平均三・四頁に一語づつ、最も頻度の多い卷は卷第十の三十一語であるが、そこでは一・五頁に一語づつ語られてゐることになる。およそ平家物語は、古くから哀感の文學的表現をもつもの、あるひは無常觀の美的、ないし詠歎的表現をもつものとして受けとられ、その行間ににじみ出る悲哀感を見無視してはありえないものとして、愛され親しまれて來たのであるが、百六十七語にも及ぶあはれといふ言葉の出現頻度は、たとひそこに戦記もの特有の類型的、概念的な用ゐ方があるに⁽²⁾しても、そのことを裏書きするものといつてよいかも知れない。

しかしながら、はたしてさうであるか。いつてしまへば、實際には、平家物語の哀感は、かならずしもこれま⁽³⁾で受けとられて來たやうには單純ではないのであり、またあはれといふ言葉も、決して單純に受けとられるべき性質のものではないのである。ここに、單純ではない、といふ意味は、たとへば歡喜だとか、悲哀だとか、讚美だとか、詠歎だとかに先立つて發せられる言葉としてのあはれの表現する感情の種類が、數量的に豊富であるといふことを指してゐるのではない。あはれを支へてゐる感情の内容(平家物語ではその殆どが悲哀といへる)が、

内質的に深く廣いといふことなのである。あはれといふ言葉の發せられる基盤が、複雑にして且つ深奥なる情緒内容、あるひは思想内容をもものに根ざしてゐるといふことなのである。平家物語におけるあはれは、從來のそれと異なつて明らかに變質してゐるのである。その變質はどのやうにであるか。その變質を知るためには、まづあはれの本來的意味を考へておく必要があらう。

本居宣長によれば、あはれとは、元來、深く心に感じて發せられる性質の言葉である。あなとか、あやとか、ああととか、はやとかいふ言葉とは、同義語である。たとへば、「やつめさす出雲建が佩ける太刀黒葛多卷さき身なしにあはれ」、「しなてる片岡山に飯に飢て臥せるその旅人あはれ」、「早川のせにをる鳥のよしをなみ思ひてありしわが子はあはれ」、「なごの海をあさこぎくれば海中にかこぞなくなるあはれ」そのかこ」などである。また、「あはれてふことだになくば何をかは戀のみだれのつかねをにせむ」、「あはれとも君だにいはゞこひわびてしなむ命をしからなくに」、「むらさきの一もとゆゑにむさし野の草はみながらあはれとぞみる」、「色よりもかこそあはれとおもほゆれたがそでふれし宿の梅ぞも」に見られる、あはれてふこと、あはれといふ、あはれとみる、あはれとおもほゆ、なども、それぞれ、心に深く感じて歎ずることであり、歎じていふことであり、歎じて見ることであり、歎じて思ふことであつて、すなはちあはれとは、すべて物に心が感動して歎ずることの義である、とされる。

ここに、いはゆるもののあはれとか、あるひはもののあはれをしるといふことが出てくるのであらうが、こゝでももののあはれについて感じたことを一言いつておくと、石上私淑言のなかに次のやうなことが見られる。

たとへばうれしかるべき事にあひてうれしく思ふは、其うれしかるべき事の心をわきまへしる故に、うれしき也。又かなしかるべき事にあひてかなしく思ふは、其悲しかるべき事の心を辨へしる故に、かなしき也。

されば事にふれて、其うれしうかなしき事⁽⁵⁾の心をわきまへしるを物のあはれをしるといふなり。

ものに心が感動して歎ずる言葉があはれであつた。その「もの」とは、こゝでいふ「事の心」を意味してゐる。その事の心の「事」とは、事象一般を指してゐるであらう。事の心をわきまへしることが、もののあはれをしることであるならば、もののあはれとは、事の心の謂であるといへる。すなはちそれは、もの⁽⁶⁾のあはれとして、存在論である。ところで、もののあはれをしること、わきまへることによつて、もの⁽⁷⁾のあはれが現成する、つまりあらはになるのであるから、それをしること、わきまへることが、もの⁽⁸⁾のあはれといふことの前提條件とならう。つまり、あはれと感ずることによつて、事の心、すなはちもの⁽⁹⁾のあはれがあらはになるとすれば、そのときもの⁽¹⁰⁾のあはれはもの⁽¹¹⁾のあはれとなる。これは認識論である。かくしてもの⁽¹²⁾のあはれは、「の」を中心として、アクセントを「もの」においたり、「あはれ」においたりする。いはば客觀對象としてのもの⁽¹³⁾のあはれが、わきまへしられることにおいて、主觀認識としてのもの⁽¹⁴⁾のあはれとなる、と一應考へられるやうである。しかしながら、もの⁽¹⁵⁾のあはれは單にもの⁽¹⁶⁾（もの⁽¹⁷⁾のあはれ）があつて、それを見てあはれ（もの⁽¹⁸⁾のあはれ）と感ずるといつた、直列的な認識構造をもつものではあるまい。おそらくもの⁽¹⁹⁾のあはれは、客觀としての存在でもなく、また主觀としての認識でもない。もの・あはれ、存在・認識、さうした自覺的な區別以前に、ヨーロッパ的な主客分離以前に、もの⁽²⁰⁾のあはれはある。もの⁽²¹⁾のあはれは存在の認識ではない。もの⁽²²⁾（もの⁽²³⁾のあはれ）はそれを見る以前に存在してゐる、とともにそれを見る以前には存在してゐない。あはれ（もの⁽²⁴⁾のあはれ）は、もの⁽²⁵⁾（もの⁽²⁶⁾のあはれ）をしる以前には非存在でありながら、また同時にそれ以前に存在してゐる。すなはち、もの⁽²⁷⁾もあはれも分離してをらずに、「の」において一としてある。しかも、存在論としてのものと認識論としてのあはれも、「の」において一ながらに、また「の」において分離してゐるのである。距りながら一であり、一でありながら距つてゐる。

かかる、もののあはれの微妙なる相即性、交感性は、「の」に問題があると思はれるのである。

ところで、あはれとは、事の心をわきまへ、もののあはれをしることによつて、心が感動し、發せられる言葉である。一應いつてよいのだが、さらに折口信夫の所説をきくと、概ね次の通りである。「あはれと言ふ語は、色々な種類の感情を表す場合に通じて、發せられる呼び聲で、(中略)殆、意味のないのに近い聲であ」り、「果して始めから色々な内容を持つてゐたかどうか。恐らく當初は、感動の語として單純なものであつたのが、使はれてゐるうちに内容が多くなり、含蓄が豊富になつて來たものに違ひない。即ち、其は「あはれ……にてあり」として、その中間に挿入した言葉が澤山あつたのだ。つまり、あはれに限定された感情の種類が幾つもあつて、其等があはれにだけ、印象的に残つて來て居るのだと思ふ。その爲に、我々には、あはれの内容が幾通りにも考へられるのである⁽⁷⁾。すなはち、「あはれ」と言ふ副詞の形を考へて、それに續いて、敘述語が、或時は悲觀的な、或時は樂觀的な、又、積極的な、消極的な様々な意味のものが自由に續いて來る譯だが、其肝腎な部分を省いてしまつて、あはれだけしか言はない。(中略)だからあはれと言ふ語自身には、色々な意味はない。次に續く敘述語或は敘述部が、様々な意味内容を持つてゐたのだ。それを、(中略)文章の上では多くの場合、捨てゝしまつたのだ⁽⁸⁾」といふのである。

かうして、捨てられてしまつた感覺的な種々の敘述語、ないし敘述部の意味を内容してしまふに到つたあはれは、特に平安期においては人の昂つた感情のすべてを抱擁し、意味するやうになつて來たわけであるが、平家物語のあはれは、さうした意味をもつて使はれてゐる場合もあるけれどもそれは稀で、それが殆ど「哀」と書かれてゐるやうに、特に悲哀感を内容してゐる言葉に限定されて來たといへる。しかもその哀れを支へる基盤がひどく思想的に、ないし時代感覺的に深奥複雑になつて來たのである。それは、ひろくいへば平安期と中世におけるあ

はれの質的相違といへるであらう。

多くの感情内容を有するとしても、一概に、源氏物語や枕草子などによつて代表される平安期の文藝の示すあはれには、完成されたもの、いはば古典的なもの、すなはち結果のもつ静けさとか、みやびとか、いはゆるもののあはれのなしみじみとしたものと、それへの共感が内包されてゐるといへよう。津田左右吉は平安朝人の心理に「美しい小さい眺めを愛する自然の傾向」⁽⁹⁾があるとして、「その愛する風物もその美しさも優艶の一面に限られてゐて」、その対象は「優艶なものの小さいものの力の弱いものである」⁽¹⁰⁾といつてゐる。事實、うつくしく愛らしきものを、たとへば枕草子は次のやうに列挙してゐる。「うつくしきもの 瓜にかきたるちごの顔。雀の子の、ねず鳴きするにをどり来る。二つ三つばかりなるちごの、いそぎてはひ来る道に、いとちひさき塵のありけるを目ざとに見つけて、いとをかしげなるおよびにとらへて、大人などに見せたる、いとうつくし。頭はあまそぎなるちごの、目に髪のおほへるをかきはやらで、うちかたぶきて物など見たるも、うつくし。おほきにはあらぬ殿上童の、さうぞきたてられてありくもうつくし。をかしげなるちごの、あからさまにいだきて遊ばしうつくしむほどに、かいつきて寝たる、いとらうたし。雛の調度、蓮の浮葉のいとちひさきを、池よりとりあげたる。葵のいとちひさき。なにもなにも、ちひさきものはみなうつくし」⁽¹¹⁾（二五一一段）。

ともあれ、平安期のあはれには、完成しつくしたものの、爛熟しつくしたものの、さらにはそれのもつ崩壊感覺、不安、ないし危機感といったものは見られない。いふなれば、靜止的である。觀照的である。もののあはれも、もののあはれも、ともに停止してゐる。源氏物語から任意にそのいくつかを引例して見よう。

手さぐりのほそくちひさき程、髪のいと長からざりしけはひのさま、似通ひたるも、思ひなしにや、あはれ